



No. 40 [平成 24 年 3 月 8 日]

岡山県総合教育センター

〒716-1241

加賀郡吉備中央町吉川 7545-11

TEL(代) (0866)56-9101

(特別支援教育部) (0866)56-9106

〈特別支援教育部相談専用電話〉

TEL (0866)56-9117

<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

集団の議論による授業づくり・授業改善

授業の話し合いができているのか？

特別支援学校の多くの授業は、T・Tで指導をしています。しかし、先生方から「複数で指導していると、いつもうまく場合だけではなくて、気持ちのすれ違いが自然とでてきます」とか「あの先生の指導の仕方に関して、言いたいことがあるんだけど、1年間一緒にやっていくことを考えると何も言えません」などといった声を聞くことがあります。このような先生同士の関係性の中では、授業づくりや授業改善について自由に発言をしながら進めていくことは困難なように思います。学習グループや学年を構成する先生方は、教職経験年数、特別支援教育経験年数、特別支援に対する専門性等に違いがあり、授業を進めていく上でズレが生じやすい要因がいくつも見受けられます。しかし、このズレばかりを意識し、お互いが1年間、無難に過ごすということのみを求めた場合、授業の話がまったく集団で行われなかったり、表面的な話で終わったりなど、授業づくりや授業改善が本来の目的を失い、形骸化したものになってしまうことが十分に予想されます。

ある研修会に参加して考えたこと

それでは、このように本音で話ができにくい教師集団で、まず何を行えばよいのかということですが、私は、このような状態だからこそ、原点に戻って個々の先生方が自分の考えや思いを素直に出していく状況や場面を意識して設定していくことが大切だと考えます。では、どのような方法で本音を伝え合うのかということですが、私は付箋紙を使って、自分の考えをアウトプットしていく方法が有効だと考えます。

本年度、サポートキャラバンで伺った学校での研修で次のようなことがありました。授業後の反省会で、司会の方が「今日の授業で何か気付いたことがあれば、先生方からお話をしていただけませんか」という投げかけをしました。しかし、フロアからは何も反応がなくし～んとしたままで、しばらく沈黙が続きました。このような状況は、各学校でも研究授業の反省会や学年会、部会などであるのではないのでしょうか。これは、自分が話題に対しての口火を切りたくないとか、発言したことで相手がどのように思うのかが心配であるなどといった意識が先行し、自分自身の発言を抑制してしまい、言わないということ自分で防御している印象を受けました。

このままでは、授業反省会が、機械的に終わってしまい、参加された先生方の授業に対する考えや思いを引き出すことができないと考え、一人一人が主体的に授業反省会に参加できるように先生方を6～7人の小集団に分け、テーマを具体的に決めての、ワークショップ型の研修を行っていくことにしました。話し合いのテーマは、①授業者が設定した目標達成を行う上で特に有効な手だては何であったのか、②授業目標を達成させるためにさらに改善を要するものは何であったのか(支援、授業構成等々)の2点とし、個々に思いつくことを付箋紙に書いてもらうことから始めました。そうするとどうでしょう。発言を躊躇されていた先生方が勢いよく鉛筆を付箋紙に走らせ始めました。一番驚いたのは若い先生方が熱心に何枚も付箋紙に自分の思いをぶつけてペンを走らせているということでした。このような姿を見ていると、決して先生方は授業に対する考えや思

いがないわけではなく、教師同士の「輪」を尊重するあまり、本音をアウトプットしていくことに躊躇しているような感じを受けました。そう考えるなら、アウトプットの方法を工夫していけば、先生方の思いを引き出し、教師相互が何を考え、どのような思いで授業を展開しているのかを理解していく糸口になっていくのではないのかと思いました。

以上のことは、サポートキャラバンで行った研修の一場面でしたが、このような方法を学年会やグループ会に持ち込みながら、授業づくりを行ったらどうでしょうか。話し言葉で自分の考えを直接言うよりも思いや考えを素直に出しやすいのではないのでしょうか。書いた付箋紙を整理をする段階で、いつも考え方が違うと思っていた先生と、気づきが同じだったりすると、「え～そうなんだ」という親近感が生まれ、相手を理解するよい機会にもなるかもしれません。また、付箋紙を使った授業づくりや授業改善は、よい授業を作っていくための方法を相互で練り上げていくためのものですから、考えがポジティブに作用していく要素を持っています。

授業づくりの一步は、自分の考えや思いを何かで表明することです。その表明した考えが間違っているとしても、言葉足らずでもいいのです。その表明こそが集団の議論の第一歩です。

T・Tのよさを集団で論議することによって引き出そう

特別支援学校の授業は、T・Tで役割を明確化させているということ、放課後の話し合いの時間の確保がなかなか難しいことから、主の授業担当者が授業を考え、実際の授業も引っ張っていていることが多いのではないのでしょうか。一見合理的な方法に見えるかも知れませんが、実は教師相互のコミュニケーションの場をいつの間にか無くしていつまでもいままいます。このような話し合いの場面の中で、相手のものの考え方や、思いなどを感じ取りながら同僚性を高め、授業に対する共通の認識を持っていくのだと思います。この過程を抜いてしまい、授業直前まで指導略案を出さないとする、主指導者は授業が理解できていても、他の副指導者は、何をどのように進め、どのような支援を具体的に行っていけばよいのかが分からず、授業の中で見せる子どもたちの行動に対して、意図的な働き掛けはできにくくなってしまいます。

特別支援学校の授業づくりのよさは、授業に関わる複数の先生方が、子どもたちの実態や課題から引き出した授業目標の達成のために、集団的な議論を通して、支援方法や教材、教具の具体化を図れることにあります。また、話し合いの過程だけでなく、実際に教材、教具を一緒に作る中で、教材、教具を子どもたちがどのように受け入れてくれるのだろうかなど、相互にイメージを巡らせる中で、子どもたちに対する考えや思いを共有化することができます。特別支援学校のT・T指導のよさを十分に発揮できるように、付箋紙を活用した話し合いの方法を工夫することで、集団で授業について議論ができる場を学年、学習グループの中に持つことがいま非常に大切ではないのかと思っています。

また、その集団で議論する場は、教師としての力量形成を図る場であり、若手教員の育成の場でもあります。その意義もしっかりと押さえながら、話し合いができる場の確保と、参加者全員が主体者として話し合いができる方法を各学校で工夫していただきたいと思っています。

自分達の授業づくりの反省をしよう!

本年度もいよいよ終わりに近づき、春ももうそこまでやってきています。先生方は、個別の指導計画や個別の教育支援計画など、子どもたちのまとめに取り組みされていることと思います。さて、子どもたちのまとめが一段落してからでもよいのですが、先生方の授業のまとめをさされてみてはいかがですか？前述の方法で、自分達の授業づくりについての成果と課題を出し、来年度の授業づくりに向けた改善点を洗い出していきます。そうすることで、次年度に向けて何をすればよいのかが必然的に見えてくると思います。教師一人の力は限られているかも知れませんが、集団で議論を行うということは、その弱さを補完し、それに気づいていくことができるということです。年度末にしっかりと話し合うことが大切ですね。

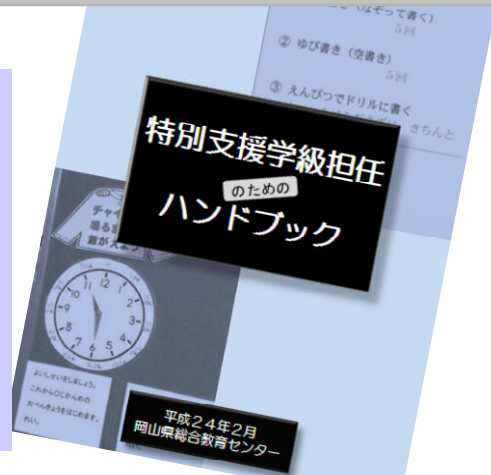
(特別支援教育部 高橋章二)

特別支援教育部 今年度の研究

「特別支援学級担任のためのハンドブック」の作成

研究の目的

岡山県の小・中学校において、数多く設置されている自閉症・情緒障害特別支援学級及び知的障害特別支援学級を担当する先生方を対象に、特別支援学級を担当するに当たって必要であると想定される教育課程や指導に関する知識等の情報をブックレット形式にまとめました。

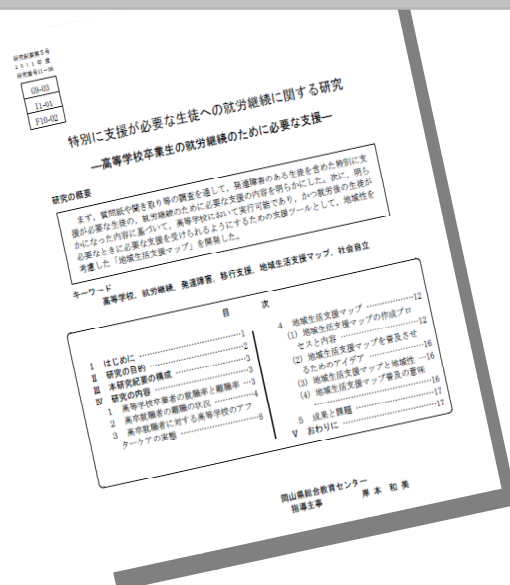


<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chousa/kiyou/h23/11-08.pdf>

特別に支援が必要な生徒への就労継続に関する研究 — 高等学校卒業生の就労継続のために必要な支援 —

研究の目的

高等学校卒業後に就労を果たした特別に支援が必要な生徒が、必要なときに必要な支援を受けることができる実効性のある支援ツールを開発しました。



<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chousa/kiyou/h23/11-06.pdf>

是非御覧いただき、御活用ください